

Difficulté liée à l'acquisition des expressions de la modalité - le cas de " n desu "

Kazuko Ushiyama

► **To cite this version:**

Kazuko Ushiyama. Difficulté liée à l'acquisition des expressions de la modalité - le cas de " n desu ". 2005. <hal-00963673>

HAL Id: hal-00963673

<https://hal.archives-ouvertes.fr/hal-00963673>

Submitted on 21 Mar 2014

HAL is a multi-disciplinary open access archive for the deposit and dissemination of scientific research documents, whether they are published or not. The documents may come from teaching and research institutions in France or abroad, or from public or private research centers.

L'archive ouverte pluridisciplinaire **HAL**, est destinée au dépôt et à la diffusion de documents scientifiques de niveau recherche, publiés ou non, émanant des établissements d'enseignement et de recherche français ou étrangers, des laboratoires publics ou privés.

「日本語のモダリティ習得における難しさ－「～んです」を例に－」

グルノーブル第三大学 牛山 和子

キーワード: «コミュニケーションモダリティ»; «コミュニケーション文法»

1. はじめに

今回の CERRA-LEJ 公開セミナーの共通テーマは『日本語教育における「難しさ」－構造と表現』だが、この構造と表現という二つの事柄を改めて考えてみると、学習者にとって言語の構造そのものをシステムとして理解することは絶対的な難しさではないかもしれない。しかし、その知識を表現レベル、つまり運用レベルにまで持っていくことは言語のシステムを理解する以上に難しいと言えるのではないか。というのは、ある表現を適切な形で使用する為には、発話場面や話題、話す相手との関係といった所謂会話のコンテキストの他に、その言語が好む言い回しや構文、さらに談話の構成の型なども理解しなければならないからである。こういった表現の習得における難しさは日本語を学ぶ学生達を通して、また、自分自身のフランス語習得の過程を通して常に感じてきた。「文法的、構文的には(ほぼ)誤りのない発話だ。しかし、ネイティブであればこういう言い方はしないだろう」と。

今回取り上げる「～んです」のモダリティ習得における難しさも、まさにこの自然で適切な運用レベルという点での難しさといえるのではないだろうか。

本稿では4種類のコーパス(後述)を通して「～んです」の基本的なモダリティ機能を改めて確認し、これを日本語学習の現場に役立てたいと思う。

2. モダリティの定義: フランスと日本

日本語の「のだ」についての先行研究は多く¹、また日本語教育の分野からもすでにその習得の難しさについての研究報告がある。ただ、話し言葉の「～んです」に限っての研究は書き言葉の「～のだ」ほど多くないようであるし、私自身、実際の日本語教育の現場での観察を通して「～んです」の適切な運用は、確かにフランス人日本語学習者にとっての難しさの一つであると感じている。そこで今回話し言葉としての「～んです」のもつモダリティとはなにかを日本語教育の立場から再検討することにした。そして、この考察をもとに学習者にわかりやすく「～んです」の使い方を提示したい、このモダリティ表現をまずは会話の中で自由に、そして的確に運用できるようになってもらいたい、これが今回の研究の動機であるが、まず、研究の理論的前提としてモダリティの定義²についてごく簡単に確認しておきたいと思う。

¹ 松岡弘(1987): “PからQのだ”; 野田春美(1992): ムードの「のだ」とスコープの「のだ」など。また日本語教育の分野では 小金丸春美 (1990)の「～のだ」の誤用分析(形の誤り、非用、不適切な使用)などがある。

² Antoine Culioli は “モダリティ” と “モダリザション” を区別 (1975-1976)し、前者を論理学や文法論、意味論の分野の用語とし、主として時制や副詞、構文など言語要素の観察をするもの、後者を記号論や語用論などの分野の用語とし、主として発話者のさまざまな言語行動を研究の対象とするものとした。(V.de Nuchèze & J.-M Colletta (éds) (2002), *Guide terminologique pour l'analyse des discours*, p.117)

フランスにおけるモダリティについての関心は古くからあり、中世に端を発するとされるが、本格的なモダリティ研究は シャルル・バイイ (Charles BALLY 1932) が文の構成要素を dictum と modus に分けて考えたことから始まったとされる。日本語では dictum は“命題”、“言表事態”、modus はモダリティ、“言表態度”と訳されている。

バイイのモダリティの定義³によれば、モダリティとは、発話内容についての発話者の知的、情緒的、意思的な判断、あるいは物の見方や心的状態を表す言語指標をさす。

モダリティに関する研究は、日本においては金田一春彦、時枝誠記、寺村秀夫などによる研究以降、多くの研究者によって進められているが、モダリティという概念そのものについては基本的にバイイと同様の視点で研究が進められていると考えていいようだ。

たとえば 益岡隆志 は 1999 年の論文でモダリティを次のように定義している。

(...) 文は表現主体から独立した客観的な事態を表す部分—これを「命題」と呼ぶ—と、表現主体の発話時における判断、発話・伝達態度を表す部分—これを「モダリティ」と呼ぶ—からなる⁴。

3. コミュニケーションモダリティ

モダリティの類型を見ると、真偽・価値判断を示す「ダロウ、ベキダ、カモシレナイ」、推定を表す「ヨウダ・ラシイ」など、いろいろな意味を担うモダリティ⁵があるが、これらと比べて説明のモダリティといわれる「～んです(～のだ)」、特に会話における「～んです」が違っているのは、「～んです」は、発話が聞き手に伝え得る実質的な“情報価値”に直接には関与しないという点にあるように思われる。

真偽判断の「～でしょう(～だろう)」を例にとって見てみよう。

- A. 「明日は雨です」
- B. 「明日は 雨でしょう」

上記の二つの文を比べると、A 文と B 文では聞き手が得られる情報価値は大きく変わってくる。A が聞き手に「明日は雨だ」という確定情報を与えるのに対し、B は「明日は雨になるだろう」という非確定情報(推定・予測)を与える。つまり、真偽判断のモダリティである「～でしょう(～だろう)」は、ある事態(明日は雨)と密接に結びつく情報価値を担っていると言える。

次に「～んです」を含む文と含まない文を見てみよう。

- C. 「明日は雨です」

この定義に従えば本稿で扱う内容は“モダリザション”に関するものと言えようが、本稿においてはより一般的に用いられている用語“モダリティ”を用いる。

³ «[La modalité est] la forme linguistique d'un jugement intellectuel, d'un jugement affectif ou d'une volonté qu'un sujet pensant énoncé à propos d'une perception ou d'une représentation de son esprit [...] ».

C. BALLY (1942), « Syntaxe de la modalité explicite », in *Cahier de Fernand de Saussure*, N°3, Genève.

Cf. PAVEAU, M.-A. et SARFATI, G.-E. (2003), *Les grandes théories de la linguistique. De la grammaire comparée à la pragmatique*, p.92.

⁴ 益岡隆志(1999) 『言語』 vol. 28 No.6 「命題との境界をもとめて」 p.46

⁵ 益岡隆志は次の 6 種類をあげている：真偽判断「ダロウ」など、価値判断「ベキダ」など、説明「ノダ」など、表現類型「命令表現など」、丁寧さ「デス・マス」、伝達態度「ネ」など (益岡 1999 : 48)

D. 「明日は雨なんです」

C文とD文を見てみると、この二つの発話は共に「明日は雨だ」という確定情報を伝えている。言い換えると「～んです」の有無は基本的な“情報価値”からは独立したものと言え、Dの発話は聞き手に実質情報以外のものを伝えている。つまり「～んです」のモダリティが担うのは先に見た真偽判断のモダリティ「でしょう(だろう)」のように、ある言表事態に密接に関わる実質的意味内容についての情報ではなく、話し手の心的状態に関わる情報である。「～んです」を使うことによって、話し手は発話内容や聞き手に対するさまざまな思いを表現することができるといえよう。

このように、ある要素がないと、コミュニケーション上の価値が変わってしまうというところに「～んです」のモダリティとしての特徴があるように思われる。ここではこういったタイプのモダリティをわかりやすく「コミュニケーションモダリティ」と呼び、次のように定義してみたいと思う。

「コミュニケーションモダリティ」とは、発話が伝える実質的な情報に寄り添う形⁶で表れ、その発話内容に、コミュニケーション上の付加的価値、たとえば語調調整(強調・緩和)、感情伝達(中立・思い入れ)などのさまざまなニュアンスを与えうる言語指標である。

これは暫定的な定義であるが、これに照らせば今回問題とする「～んです」や、伝達態度を表す終助詞の「ネ」⁷などはこの「コミュニケーションモダリティ」に相当すると考えられる。さらに、会話における間投詞(あ、う、ええと、う～ん、など)、イントネーション、会話の“間(ま)”、書き言葉における句読点、括弧づかいなども広い意味で言えば、コミュニケーションモダリティとして捉えられるかと思う。

4. コーパス観察と分析

さて、これからコーパスの観察と分析に入りたいと思うが、手順は次の通りである。まず、問題提起の資料として、フランス人日本語学習者の「～んです」の使用をいくつか観察する(コーパス 1)。次に母語話者である日本人による「～んです」の使用を3種類のコーパス源(コーパス 2, 3, 4)から収集し、日本語母語話者が有する「～んです」のモダリティ機能の整理・分類を試みる。

4.1. フランス人日本語学習者の「～んです」の使用例

以下の例はグルノーブル第三大学 LEA (Langues Etrangères Appliquées)の英語・日本語専攻の一年生と二年生の学生の「～んです」の使用からの抜粋⁸である。

<1-1>

A1 先週末は何をしましたか。

B1 旅行をしました。

A2 ああ、そうですか。どこへいきましたか。

B2 ストラスブールです。パリまでTGVで行ったんです。そしてバスに乗ったんです。

⁶ 真偽判断を表す「ダロウ」や価値判断を提示する「ベキダ」などは、これとは対照的に、実質的な情報に“介入”する形で表れるモダリティと言えようか。

⁷ 先に紹介した益岡隆志の分類を参照されたい (Note 5)。

⁸ これは仏語和訳の解答として学生が書いたものだが、会話文の訳ということで、学生の「～んです」表現の運用の一端が観察されるかと思う。

<1-2>

A1 明日は病院に行かなければなりません。

B1 どうしたんですか。

A2 あ、私は大丈夫です。

A2.1 私の友達を見に行きます。病気です。

A2.2 私の友達に会いに行きます。病気ですから。

コーパス<1-1>のA2やB2について、これらを自然と感じるか否かは意見の分れるところかもしれないが、A2は日本語母語話者なら、「そうですか。どこへ行ったんですか」という表現を選ぶのではないだろうか。コーパスの<1-2>のA2.1、A2.2も「～んです」が使用されていないことに物足りなさのようなものを感じる。逆に<1-1>のB2は、日本人なら特別なコンテキストがないかぎり、ここで最後の二文に続けて「～んです」を使うことは少ないのではないだろうか。この“違和感”のような印象はどこから来るのか、以下、日本人のコーパス観察と「～んです」のモダリティ機能の分析を通して考えてみたいと思う。

4.2. 日本人の「～んです」の使用の実際

さて、これから日本人の実際の使用から「～んです」のモダリティ機能を分類していくわけだが、コーパスは次の三つの資料から収集した。

- ① 日本語の教科書 *Parlons japonais I, II* (2000, 2003) (以下 PJ 1 ; PJ 2 と表記)
- ② 日本の雑誌『クロワッサン』No. 511 (1999) (以下 CR と表記)
- ③ インターネットサイトからの抜粋 (2003年5月検索) (以下 IN と表記)

この三つの資料から約400の「～んです」を含む文(会話体)を観察したが、観察の対象はいくつかの基本的な形の「～んです」の形に絞り、「～んじゃないですか」、「～んですから」などの形、モノログの中に表れる「～んだ」、また他のモダリティ表現と共に使われた「～んです」は取り上げていない⁹。具体的に言うと、質問文内の「～んですか」、応答文内¹⁰の「～んです」、質問文、発信文に表れる切り出し表現「～のことなんです」、及び言い切りを避ける「～んですが(けど)」に絞って観察した。これはごく基本的な形の「～んです」の用法を数多く観察することで、この表現の中核的なコミュニケーションモダリティ機能が見えてくるのではないかと思ったからである。

5. コーパス分析：「～んです」の中核的モダリティ機能とはなにか

コーパスにあらわれる約400の「～んです」の使用例を観察した結果、「～んです」のごく中核的なコミュニケーションモダリティ機能は、“情報・説明・確認の要求や提示”、そして、それに対する“話者の関心・興味・思い入れなどをアピールすることである”¹¹と、定義できるかと思う。

⁹ モダリティ、特にコミュニケーションモダリティの分析においては、レジスター(フォーマル vs. インフォーマル)、発話形式(ダイアログ vs. モノログ)などを考慮に入れ、観察の範囲をはっきりさせておくことが大切かと思われる。

¹⁰ 応答文はある質問に対する答えの文、発信文は質問文、応答文以外の会話構成文、特に話題を提供する文を指す(例：「昨日ね、海へ行ったんです。」)

¹¹ 応答文、発信文に関しては“実情説明”の機能もある(後出の表を参照されたい)。

例えば 質問文内にあらわれる「～んです」の表現を支える話者の代表的な発話動機のひとつをごく簡単に言語化してみると、「(私はこのことに)とても興味・関心があります。教えてください。」となり、応答文または発信文にあらわれる「～んです」の発話動機は、「(わたしはこのことを)伝えたいです、聞いてください。」となるかと思う。

コーパスから二つ例をあげてみる。(下線は本稿筆者)

<2.1.1>

A1 サンドリンヌさん、今度の夏休みに何をしますか。

B1 夏休みにはアメリカへいきます。

A2 へえ、アメリカですか。何をしに行くんですか。

B2 アメリカの会社に研けんしゅうに行くんです。(PJI : 100)

<2.1.2>

A1 すてきなブローチをしていますね。どこで買ったんですか。

B1 入学祝いに父がくれたんです。(PJI : 114)

2.1.1、2.1.2 の中の質問文 (2.1.1 A2、2.1.2. A1) に表れる «～んですか» は共に話題に対する情報要求と 話題に対する 話者の関心とを示している。そして 応答文 (2.1.1. B2、2.1.2. B1) において話者は ある思い入れ (喜びなど) をもって求められた情報を提示している (アピールしている) といっているかと思う。

ただ、このアピール機能は 常に思い入れや 関心などを表すのではなく、いわゆる“背景情報”の役割を担うこともある。これは「～んです」表現が主として、発話のどこに、どんな情報を伴って、あるいは どんな言語要素と結びついて 出てくるかによって、変わってくるようである。具体的に言うと、背景情報をアピールする「～んです」は 所謂 発話の切り出し部分に 接続助詞「が」などを伴って多く表れ、思い入れや関心のアピールというよりむしろ語調緩和や丁寧さといった話し手の «配慮» の指標と言えるかと思う。いくつか 例をあげてみる (下線は本稿筆者)。

<2.2.1>

あの、ひとつ質問なんですが、このセミナーはすべて日本語で発表することになっているんでしょうか。(PJ II : 199)

<2.2.2>

[私が作るフルーツケーキは] 日本全国と海外にも送ることになっているんだけど、皆が楽しみにしてくれているの。(CR : 33)

<2.2.3>

「アピオニクス」って聞き慣れないんですが、どういう意味なんですか。(IN : mai 03)

この3つの例では、発話の切り出し部分と中心部分に「～んですが」・「～んです」(及びその表現形のバリエーション) が使われているが、コーパスを観察すると明らかのように、切り出しの「～んですが」は、話題を展開する為の背景的情報、話題導入といった役割を担っている。ただ、この場合でも広い意味で言えば、聞き手への配慮といったコミュニケーション上のアピール機能はあるように思われる。これまでの説明を簡単にまとめ、以下に表の形で示してみたいと思う。

◆ 「～んです」の基本的なモダリティ機能分類と「～んです」習得の手がかりとしての“コミュニケーション文法”（試案）

A. 情報・感情のアピール機能（関心・興味・思い入れなどの指標） B. 背景情報のアピール機能（語調緩和・丁寧さなどの指標）	
Note：下記の例文はコーパスよりの引用である。例文中の枠囲みの部分は、広い意味での、「～んです」との“呼応表現”（後述）を示している。	
質問文内にあられる「～んです」	応答文・発信文内にあられる「～んです」
<p>◆ 情報・説明・確認を 求める</p> <p>A： プラチナとホワイトゴールドとシルバーは どう違う<u>んですか</u>。 世界で初めての建設機械は<u>なんだったんですか</u>。 どうすれば治る<u>んですか</u>。 どうして無料<u>なんですか</u>。</p> <p>高い！<u>¥7800もするんですか</u>？ そんなことしていいの？ <u>えー</u>、全部テストする<u>んですか</u>？ 水の効能<u>って</u> <u>そんなに</u> <u>凄いですか</u>？</p> <p>B： 8月にNZに行く予定<u>なんです</u>が[どこか いいホテルを教えてくださいませんか]</p>	<p>◆ 情報・説明・確認を 提示する</p> <p>A： すみません、それだけしかない<u>んです</u>。 [ええ、そう] そう<u>なんです</u>。</p> <p>B： 私には子供が2人いまして、上の子は六年生<u>なんです</u> が[よく掃除を手伝ってくれます] モデルとかじゃなく普通の人を撮っている <u>んです</u>が、[写真はおもしろいですね]</p> <p>A： ちょっとした工夫で省エネルギー <u>って</u> できる<u>んです</u>。 <u>実は</u>将来は友人数名とお店をやりたいと 決めている<u>んです</u>。 腸内細菌は花粉への抗体も作る<u>んです</u>。 タイヤの役割 <u>って</u> <u>重要な</u> <u>んです</u>。</p> <p>◆ 実情説明・“講義”</p>
会話文法・コミュニケーション文法（より自然な会話のための留意点）	
<p>◆ 日本人話者が通常ほぼ例外なく「～んです」を選択するのは、強い関心、興味、思い入れ、驚きなどを込めて説明を求める、または説明を提示する場合である。 (例：顔色が悪いですね。どうしたんですか。ー 頭がいたいんです。／とってもうれしそうですね。どうしたんですか。ー 明日友達とパリに行くんです。)</p> <p>◆ これに関連すると思われるが、希望、願望、好み、関心などを積極的に示す場合などにも日本人は通常「～んです」を使う。(例：私はジャズが大好きなんです。)</p> <p>◆ ただし、「コミュニケーション文法」の観点から言うと、「～んです」を続けて使わないほうがよい。続けて使うと、「～んです」のもつ話題に対するアピール機能のゆえに、発話が必要以上に説明的になって、聞き手に違和感や不自然な印象などを与えてしまう危険がある。これを避けるためには本当に自分が相手に聞きたい、伝えたい、つまり、会話中のアピールポイントに「～んです」を使うようにし、一回の“発話ユニット”（相手への会話交代までの単位）の中で二度以上続けられないようにするとよいと思われる。また、どこに「～んです」をつけるか迷ったら、発話ユニットの最後の発話につけると自然な感じになる。</p> <p>◆ 話題を提示する際、「～(のこたな) <u>んですが</u>…」と切り出すことで語調を緩和したり、丁寧さを表したりできる。</p>	

6. 「～んです」と呼応表現

さて、この表をもとに日本語母語話者のコーパスを再検討してみると、ある種の語を共に使うことで「～んです」のアピール効果を高めていることがわかる。所謂「～んです」との“呼応表現”といってよいもので、上記の表の中では枠囲みで示されている。

「～んです」との呼応表現の例としては、表中に見られるようにある種の強調や驚きを表す間投詞や終助詞、副詞、イントネーション、疑問詞、口語的表現、接頭辞、願望表現指標(例：形容詞“ほしい”、助動詞“～たい”)などがあげられる。

コーパスからさらにいくつか例をあげてみる。

- <2.3.1> あのう、すみません、ちょっとトイレをかりたいんですけど。<躊躇・遠慮>
(PJI : 141)
- <2.3.2> 特にジャズが大好きなんです。<強い思い入れ> (PJI : 155)
- <2.3.3> あれは私がずっとまえから ほしかった ワンピースなんです。<強い思い入れ>
(PJ II : 18)
- <2.3.4> [この漫画は] とにかくおもしろいんです。<強い思い入れ> (IN)
- <2.3.5> な～んで虫歯になるんですかあ～。<強い疑問> (IN)
- <2.3.6> えー 全部テストするんですか。<強い驚き> (又は<強い抗議>) (IN)
- <2.3.7> いや、本当に旨いんです。「立ち食いそば」。<強い思い入れ> (IN)
- <2.3.8> ぜひ相談したいんですが。<強い願望> (IN)
- <2.3.9> これ実は重要なんです。<実情伝達> (IN)
- <2.3.10> 脳の受け皿は足から 25%を、手から 25%を、あとの 50%は なんとあごから
情報を得るんです。<強い驚き> (CR : 20)
- <2.3.11> 人形遣いになろうと思ったのは 実は 初めからではないのです (ないんです)。
<実情伝達> (CR : 27)

これらの例から「～んです」がその呼応表現と結びつくことによってさまざまな感情、上の例で言えばためらいや遠慮、強い思い入れ(強調)、驚き、願望、実情などをより積極的にアピールできることが観察される。こういったいわば“呼応表現”を会話のコンテキストに則して徐々に学習者に提示していくことも「～んです」の持つモダリティ機能をよりよく理解する為に有効なのではないだろうか。

7. コミュニケーション文法：コミュニケーションモダリティ習得のために

さて、日本語学習者がより自然な形で「～んです」を使いこなせるようになるためには日本人がこのモダリティを好んで使う会話場を提示し、理解してもらうことが大切かと思われる。つまり「コミュニケーション文法」の学習である(前出の表の最終段参照)。表に示したように、このコミュニケーション文法では、「～んです」の自然な使用のために次の4つのポイントを挙げている。

- ① 日本人がほぼ例外なく「～んです」を選択する場面・シチュエーションを理解する。(強い興味、関心、思い入れ、驚きなどを込めて説明要求や説明提示をする場面)
- ② 「～んです」の持つアピール機能を理解する。
- ③ 「～んです」の適切な使用を理解する。(過剰使用への注意など)
- ④ 「～んです」の背景情報を伴う談話の切り出し、又は談話のまとめとしての用法を理解する。

こうしてみると、先に見た学生のコーパス (§4.1) におけるある種の不自然さが、主として何に由来するのか 説明できるように思われる。たとえば コーパスの<1-1> B2 は会話の流れからいって やや 説明的すぎるのではないだろうか。つまり情報としてアピールする必要性がさほど高くないものに「～んです」を繰り返して用いていることが、若干の不自然さを感じさせるひとつの原因になっているように思われる。

コーパスの<1-2> A2.1、A2.2は、これとは 逆に アピール性の高い情報の説明提示に「～んです」を用いていないことから生じる **日本語の会話としての“不自然さ”、“物足りなさ”とでもいう問題ではないだろうか。**

また、§3 で見たように「～んです」の運用が何故むずかしいのかを考えてみると、ひとつには、先にも少し触れたが、基本的な質問文(～んですか)、応答文(～んです)、発信文(～んです/～んですが、...) などにおける「～んです」はこの表現があってもなくても聞き手に伝える実質情報としての価値を基本的に変えない、つまり「～んです」がなくても情報の骨子が 伝わるため、学習者が あえて「～んです」を使わない可能性があるということが考えられる。

さらに、情報や説明が会話の流れの中でアピール情報・アピール説明かどうかを判断すること、つまり「～んです」を使うかどうかは、特別なコンテキストを除いて基本的には発話者の選択に委ねられているということがあげられると思う。そして、この、使用・非使用の制限が比較的緩やか、つまり、基本的に自由であるというところに「～んです」を使いこなす難しさがあるのではないだろうか。

8. まとめにかえて: 「～んです」のコミュニケーションモダリティ習得のための学習活動について

これまで述べてきた「～んです」の持つコミュニケーションモダリティを理解するための教室活動としてはいろいろなものがあると思うが、自分の好きなこと・興味のあることについての短い発表やそれについて 学生同士 インタビューをしようというのも一方法かと思う。

二人、あるいは数人のグループを作り、一人の学生が好きな国、本 などについてごく短い紹介をする。そして他の学生は“どうして”、“いつ”などの 疑問詞と興味・関心をアピールする「～ んですか」を組み合わせ、どうして好きなのか、いつその国に行ったのか、いつその本を読んだのか、などと質問する。発表をした学生はそれに答える際、教えたい、聞いて欲しいという、いわば “アピール” 情報に「～んです」を使って答える。また、学生の学習レベルに応じて先にあげた「～んです」のコミュニケーション文法や呼応表現なども紹介し、よりいっそう表現力豊かで自然な «発表とインタビュー» 活動につなげていくことも出来るかと思う。

こうした 教室作業などを通して、学生が徐々に「～んです」の持つ豊かな コミュニケーションモダリティを理解し、使いこなせるようになってくれたらと願っている。

主要参考文献：

NUCHEZE, V. de & COLLETTA, J.-M. (éds) (2002), *Guide terminologique pour l'analyse des discours*, Peter Lang, Bern.

PAVEAU, M.-A. et SARFATI, G.-E. (2003), *Les grandes théories de la linguistique. De la grammaire comparée à la pragmatique*, Armand Colin, Lassay-les-Châteaux.

益岡隆志 (1999) 「命題との境界を求めて」, 『言語』 vol. 28 No.6 pp.46-52. 大修館書店, 東京.

コーパス：

フランス語母語話者による「～んです」の使用

- グルノーブル第三大学 LEA (Langues Etrangères appliquées) 専攻
第一学年、第二学年の学生の「～んです」の使用例から抜粋紹介

日本語母語話者による「～んです」の使用

- HIGASHI, T et OGUMA, K (2000), *Parlons Japonais Tome I* (nouvelle édition revue et augmentée), PUG, Grenoble.
- HIGASHI, T (2003), *Parlons Japonais Tome II*, PUG, Grenoble.
- 雑誌『クロワッサン』No. 511 (1999), マガジンハウス, 東京.
- インターネットサイト(サーチエンジン<Google>, キーワード「～んです」にて 2003年5月検索).